和書門
類 二七三四九 號
九 函
七 架
三 冊

内閣文庫
和書
類 二七三四九 號
三 冊
二〇〇 函
四 架
(七一才)

内閣文庫
番號 和 27349
冊數 30 (17)
函號 200 127

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十二年 第七 万十九日 此六

国立公文書館
National Archives of Japan

和こ[illegible]ことにいとはしきかけとおもひ　いまうこ[illegible]ことにもむかひ
あひは七月ちかうあひの河をわたりあひぬやはちはのおわりさし
風つきて河波立　七夕のあひのせをいとはしく
ひまれ川とをきを　工房は此乃をきかりなはいとこ
ゆるさねは中は若ふかるていま中まちはまちはは一年まちはは心し捨遺
湖詠　あとをきわたりかねらとを人九寄るは言葉かこ
なれとも　天河打橋渡妹之家路
あまれしうちく
打橋は板をしかりよ　通時不待交
河面をとき　祇曰天川ハ
打橋を渡りは此儀
乃同　[illegible]
多やうをと渡るを
もて四ツ棚橋河
ことしあり　[illegible]
も通乃とは年を

月ハ七月をとりて我ら乃雨の妹は
河ハ武蔵秋の七日の夜　ハ七月の中ちハ續てもこせすと路
うらよりふわり舟　年中より久しかさる我舟こう
とし皆七夕乃心は　天河浪者立交　吾舟者
なりてよるる意　[illegible]
[illegible]川ハ[illegible]ハ　天河　[illegible]ハ
七夕の心ハ[illegible]　幸榜　出夜之不深間　[illegible]
[illegible]こと[illegible]　直今夜　相有兒等余車問母
[illegible]こと[illegible]　未為　[illegible]
こと[illegible]ハ年ハ[illegible]　天河白浪高　吾戀
[illegible]ハ織女と牽牛　公之舟出者今為下
乃[illegible]　機
[illegible]
[illegible]

月ハ[illegible]　歸木持出天河
[illegible]
[illegible]

そらこんしめり橋
乃山みまそ山や天
いさ行橋河とと
あもれくさり立
雲と雲の袖のい
るうるとこ去衣戔
浪霞應湿ちと恨
世の行も作まり
いりいさまりて
一年待君待事乃
久きといんこて古
ちと云ぎりてうこ
い機の衣こ君待我
と衣ちれこ合りこ
けりこ命もてこも
童蒙抄云日本記第一云天孫事勝神よ問てのこ
手玉珍瓏

打 橋 渡 公之 来 為
天 漢 霧 立 上 棚幡 乃
雲 衣 能 飄 柚 鴨
古 織 義 之 八多平 此 暮
衣 縫 而 君 待 吾 平
足 玉 母 手 珠 毛 由 良 尓 織 旗 平
公 之 御 衣 尓 縫 持 堪 可 開
擇 月 日 逢 義 之 有 者 別 乃
月 日 者 明 日 副 裳 欲 得
惜 有 君 者 明 日 副 裳 欲 得
テタミモエラ

万十下 廿八

ようこと云ぎりてうこ命もてこ
と通君こ八牽牛と織女のこと
月日をりてあれて 西日本記第一云天孫事勝神よ問てのこ手玉珍瓏
月日をりてあれて
いりとりてうこ命もてこ
月日をりてあれて
いりとりてうこ命もてこ
心明く
あもれくさり立
雲立霧立上
雲と雲の袖
いりとりてうこ命もてこ
月日をりてあれて
いりとりてうこ命もてこ
人万れわさもよりり
類聚抄 才三万り
ようこと云ぎりてうこ命もてこ

天 漢 渡 瀬 深 弥 泛 船 而
棹 来 来 君 之 櫂 音 所 聞
天 原 振 故 見 者 天 漢
霧 立 渡 公 者 来 良 志
天 漢 瀬 毎 幣 奉
情 者 平 辛 来 座 跡
久 方 之 天 河 津 尓 舟 泛 而

[illegible]

君待夜寺者不明毛有寐鹿
[illegible]
天河足沾渡君之手毛
[illegible]
末秋若夜之深去良久
[illegible]
渡安船渡世平跡哮音之
[illegible]
不逢者疑橈之聲不為
[illegible]
真氣長河向之有之袖
[illegible]
今夜卷跡念之吉沂
[illegible]
天漢渡湍毎思乍
[illegible]
來之雲達有久念者
[illegible]
人尤倍也見不継將有一云兄
[illegible]

[illegible]

作有良武摩牛之嬬喚舟之
[illegible]
近附往辛
[illegible]
天漢瀬半早鴨馬珠之
[illegible]
夜者闌尓乍不合乘牛
[illegible]
渡ちり舟舟早渡一年尓
[illegible]
二適往來君尓有勿久尓
[illegible]
玉苦不絶物可良恍惚者
[illegible]
年之渡尓直一夜耳
[illegible]

八十乃千なるこゝ丙
あきくさの咲くり日
つけこそハ告るせ
あやまれてこそこの海の
こゝ七夕乃河の上
脉乃荒ぬりしと
ゆれくるせよ露
袖ぬるゝ雲ハ流
るゝれと我涙雨と
いこゝ乃つまゝ
序乃さゝふ手て
牛女の結ね中と云
わくらゝわくて
七夕乃別と惜てこそ
ものゝ思ふ袖ハ
云ひつゝ世とく無

天漢去年之渡湍有二家里
君織女今夜道乃不知久
恋日者氣長物平今夜谷
あまの川去年之渡湍有二家里
君織女今夜道乃不知久
恋日者氣長物平今夜谷
きくさの咲くり日
つけこそハ告るせ
あやまれてこそこの海の
こゝ七夕乃河の上
脉乃荒ぬりしと
ゆれくるせよ露
袖ぬるゝ雲ハ流
るゝれと我涙雨と
いこゝ乃つまゝ
序乃さゝふ手て
牛女の結ね中と云
わくらゝわくて
七夕乃別と惜てこそ
ものゝ思ふ袖ハ
云ひつゝ世とく無

天漢去年之渡湍有二家里
君織女今夜道乃不知久
恋日者氣長物平今夜谷
あまの川去年之渡湍有二家里
君織女今夜道乃不知久
恋日者氣長物平今夜谷
あまの川去年之渡湍有二家里
君織女今夜道乃不知久
恋日者氣長物平今夜谷

乾坤之初時從天漢
天地ひらけ日月星辰
ひらけ牛女ひら
を隔て向居る心
ねたましの人牛女とら
てのゆり毎年三月
する心乙女三月の頃
ふねの乙女三月
毎ごとに金色
てゆきりする毎
素八重ふる毎
ちかの毎ごとゆ
ふるこゆ

斑雪而一年丹面遍不遣
妻恋松物念人天漢
安乃川原乃右通出出方渡冊
其徳船乃柳冊蒙舶冊裳松榮
真榜繁校旗荒すき本葉裳
其世冊秋風乃吹来夕丹天
川白水落沸速流

舟立て旗は吹靡
世おるとふふ
舟よりひとる舳艫ふ
旗をとりつ
ふくせふ
乙安三年のくせ年さ
る素旗の嵐り
棹ふ吹まつはれ
のふふふれくせを
ふふやうの吹ふる
おふ舟のさいのふて
大船に乗ふてどいふ
日八形ふてどいふ
松浦よ大船のふ
ふたはれとふ おふ
ふふのたまふ松

雅草乃妻手抗跡
ふゆふふ思慕而榜来
涉乃大船乃思慕而榜来
おふふねの其夫乃子我荒珠乃
おふふふ其夫乃子我荒珠乃
寺六ふのたれこふ
年緒長思来之戀
ふふを
将蓋七月七日之
ふたまふふ
夕者吾毛悲焉
よふふ
反歌
狛錦紐解易之天人乃
こまふきひとふふふふふ
妻問夕叙吾裳将偲
ふふふふふふふふ
彦星乃川瀬渡尤小舟乃
ふふふふふふふ川
ふふふふふふふふ

得行　而　將泊　河津石所ニ思

高麗錦也　紙曰言麗の錦を七夕の紐ふすべきなり　四緒　付紐

天　地　跡　別之時從久方乃

天之河　大王　常氏　璞　月　原命　妹尓相　時　候跡　立待尓

吾　衣手尓秋風之　吹　反　者　坐　多比伎手不知　村　肝　心　不嶽　解衣　思　亂　而　何時跡　吾待　今夜　此川　行　長　有得鴨あれも

反歌

妹　尓　相　時　片　待跡　久方乃　天之　漢原尓　月　叙經　來

いり成説ニ皇を天皇と
以ハ大王の天河ニ
不足信用歟

牽牛の織女にあふぎをかりて月をまねく詩をよめる

詠花歌 三十四首

柳本朝臣人麻呂

詠花 秋の萩をよむ

さをしかの心相念秋萩の枝をたをりて妻に贈る

萩は鹿乃ほしとぶ落ちる惜毛

心あひにたるものを

ゆふされば人の秋萩萩は本枝もまばらに花咲はなれて花

枯やすけれ秋萩のさかりをも待かねしことをそもおもふ

真菅原 名引

阿太乃大野之芽子

作者未詳

秋風吹毎

花散

阿太之大野 八雲わけ

大和こたりもくさまくら

いまのおもかげ西北を

雁鳴之来喧年日及見乍将有

雁のねのさかんに月まてうあん

此芽子原尓雨打零振

これをさいはあめふりねは

奥山尓住云男鹿之初夜不去

おくやまにすむといふおしかのよなかすぎ

妻問芽子乃散

ひるはもしたいすむてふ

白露乃置巻惜秋芽子乎

しらつゆのをりまきをしみあきはぎを

折耳折而置哉枯

おりてをきやかれなん

秋田苅借廬之宿尓穂經及

あき田かりかりのやどりにほかりして

咲有秋芽子雖見不飽香聞

さくあきはぎをみれとあかねかも

吾衣摺有者不在高松之

わかきぬをすれるまつのたかき

野邊行之者芽子之摺類勇

のへゆくものはぎをすれるたけ

わすれぬとすれどふい
我衣と我ぬこすり
ふあすは萩の花ゆふ
はなれの萩の花櫛
とし言まとの太和
この中のあきかぜあきぬ
秋霧白露をんこと
し萩さうんこすると
ゆうすゆとりの
秋風しすとさく
るをうしてうてし
いさはさうゆ
あさうかはゆさ露乃
八重九重ゆさ霧乃
成くゝ八日新もよりゝ夕とも盛ゆ

此暮
この中のあきかぜあきぬ
秋風吹如白露尓
秋くれてしゆうゆ
萩子之明日将咲見
あすはさりんあ
冷成
秋くれてしすとさく
ゆうゆ
驚芽而
去来於野行奈芽花見尓
いさ野ゆうゆ萩のはなゆ
朝露夏咲雖云
あさうゆはつゆおいて咲こつと
暮陰社咲益家礼
ゆうゆ
春去者霞隱不所見有一師
萩子咲折而将挿頭
秋萩乃花折而将挿頭

萩されはすゆうゆ
花はあ春萩の花ゆ
とはさりし二ゆ神代物小形昭
袈裟ゆ中ゆ花ゆ
ゆうねぬれゆ露ゆむ
野の萩ゆはゆ
さねゆゆの花萩
沙額田野八重おゆ
萩ふゆおゆ
ゆ寄の心ゆ
ことゆふ衣はすし
萩乃花ゆ野の萩
ゆ乃ゆ衣乃
ゆとすゆ白ゆて
ゆん別ゆはすし
秋ゆゆゆゆゆ
ゆゆゆのしゆ

未萩はゆ
ゆ秋ゆ
萩原花はゆ
ゆ萩ゆ
ゆ秋ゆ
ゆ

沙額田野
沙額田野乃野邊乃秋萩時有者
さねゆゆの花折而将挿頭
今盛
いまさゆ
車更尓衣者不相住人部為
ことさゆ衣はすし
咲野之萩子尓冊穂日而将居
秋風者急之吹來萩子花
秋ゆゆはゆ
落巻惜三競いきのふ
ゆ

我屋前之芽子之若末長秋風之
わりやとのたれらそもの秋くぞの
吹南時 尓 將開跡思乎
みさちんこのさくんさくんこころを
人皆者 芽子乎秋 云 縱 吾等者
いとをみるそ萩を秋とりはいるれ
平花 之 柔 平 秋跡者 將言
おそそのすちを秋とそいそんん
玉梓 公之使 乃 手折 來有
しるたちのもとの流のいのしるわるる
此 秋 芽子者 雖見 不飽 鹿 常
これわきそもとはいたれとあうぬ
吾屋前尓 開 有 秋 芽子 常 有 者
わりやとのさくる秋をさ常ちハ
我 待 人 尓 令見 猿 物 平
まちやり人をうんをもちものを
手ざきす ち名相 植之 名知 久 出見 者
てとするたいうしとたるいたれ
屋前之 早 花 芽子 咲 尓 家 類 香聞
やこ乃るさをきちるるる

てとするふうしとも 氣兼章蔓初出事注云ふとするとハ
やすもすといわくと又わを萩とそり 仙覺抄云出事第二ゑる古点ハ
てとするふうしとも云くと点ちくと点ちくと点ちくと点ちくと
云しきうるへうしもちくと点ちくと点ちくと点ちくと点ちくと
義白点ハちれすしきうるへうしとハ
以ハ若ちらるすりしるくうるへとハ
乃ち古語りちてみをもよみく 莫囂圓隣 新何本 樂六浪
萩長乃花乃ちるちるをハくつわるる 且又美本乃名のつわ
しるもしわるしいんや氣兼卿ちるの古点をちて
たきうるへちと私乃点をちるのちよ
臆說をちるり悔乃へきしるちるを
と先をちれハを後をもちるへをき作乃
わりやとそうう 吾屋外尓 植生 有 秋 芽子乎
我有の萩を我尓 誰 標刺 吾尓 正野知
ゆしてる人をふよ
うて人のおとちる人

[illegible]

千取者袖并冊覆 巻人部師

[illegible]

此白露 仝 散巻 惜

[illegible]

白露 仝 荒争 金手咲 萩葉

[illegible]

散 惜 兼 雨 莫 零 根

[illegible]

蟋蟀等 行相乃 速縮平 苅 時

[illegible]

成 來 下 萩葉 花咲

[illegible]

神坂田ゆきかいの乃せと 仙 ハ[illegible]わせとう心 同或説田と植ゆ苗ふ宮ハ他ホの苗と植ゆ苗と彩会の稲と式

[illegible]

朝霧 之 棚 引 小野之萩 花

[illegible]

小野恨乃ホ田野之乃心咲

[illegible]

散 鑑 未 厭 仝

[illegible]

戀之久者 形見 仝 為與登 吾背子我

[illegible]

殖之秋 萩 花 咲 仝 家里

[illegible]

秋 萩子 戀 不盡 跡雖念

[illegible]

思恵也 安多良 思 又 将 相 八方

[illegible]

秋風 者日異ひろる 峡 奴 高 圓之

[illegible]

野邊之秋 萩 散 巻 惜 裳

[illegible]

大文之心 者無 而秋 萩之

[illegible]

戀 耳 八方 奈 積 而 有 南

[illegible]

吾待之秋者來 奴 雖然

[illegible]

の心いろかをとゝりわけかねてしらぬ人にもしめさしてをる

秋萩の花ゆへ

欲見

吾待戀之秋萩者

枝毛思義三荷花開二家里

春日野之萩の花

秋萩者朝東風尓散而此間尓落来根不相常言有者香

秋萩者於雁

言有可聞

一云いとゝ

散去流

秋去者鹿妹

露霜

秋萩の

詠雁歌三首

秋風尓山跡部越雁鳴者射矢遠

明闇之朝霧隱鳴而去雁者言

吾屋戸尓鳴之雁哭雲上尓

今夜喧成國方可聞

遊群歌十首

尤小牡鹿之妻問時尓月平吉三

切木四之辰所聞今時来等霜

秋萩の

露霧籠て山の端の

雁と萩の咲をる

山とこゝろの山飛雁

也へとひと音通へ心

こゝてこゝろうつるを

さりつゝ宮ふかと

あけぬれの鶏鳴

明闇の朝霧隱

とて雁なくなる

と云へ告こそ告

わかやとを鳴

宮ふかの

故國の方

天雲之外雁鳴從聞之
薄霧零寒此夜者
弥益益尓戀許曽増焉

一云秋田の刈穂のいなばかけ
雁之喧所聞冬方設而
葦邊在荻之葉尤夜藝秋風之
吹来苗丹雁鳴渡

一云秋風尓音所聞四來霜
雁宿難波寄江之葦邊者
有疑霜乃零尓

秋風尓山飛越雁鳴之
聲遠離雲隱良志
朝尓往雁之鳴音者如吾
物念可毛聲之悲
幾頭我鳴乃今朝鳴奈倍尓雁鳴者
何處指香雲隱良哉
野千玉之夜渡雁者誰
幾夜子歴而鹿巳名平告

[illegible]

[illegible]

詠鹿鳴歌十六首

作者未詳

比月之秋朝開尓霧隱
この[illegible]

妻呼雄鹿之音之亮[illegible]
[illegible]

尤男牡鹿之妻慕鳴音之
[illegible]

將至
いと[illegible]

於一君戀裡觸居者敷野之
[illegible]

秋萩子淩尤牡鹿鳴棠
[illegible]

[illegible]

雁来茅者散跡尤小牡鹿之
[illegible]

鳴成音毛裡觸丹来
[illegible]

秋萩子之戀棠不盡者尤牡鹿之
[illegible]

聲伊續伊継戀詩増益焉
[illegible]

山近家栽可居尤小牡鹿乃
[illegible]

音乎聞尤宿不勝鴨
[illegible]

山遊 尓射去ゆく薩雄者雖大有
やまの〳〵をゆきさるつかひはなれと
山尓文野尓文沙小牡鹿鳴母
山とうとし野とうとしさかりなるこゑ
廷日木笑山從来世波左小鹿之
ひとりきなくなりきさせはさをしかの
妻呼音聞益物平
はるのよりふこゑをきくなりのをと
山邊庭薩雄乃称良比恐こめ跡
やまへにつかはさつかのわかひしたと
小牡鹿鳴成妻之眼平欲焉
さをしかのなくなりなるをとをわれ
秋萩子之散去見鼾多し三
あきはぎのちりゆくをみるとこ
妻慰為良思棹牡鹿鳴母
はるのよりいすさをしかなくなり
山遠ゆく尓京ゆく尓之有者鹿小牡鹿之
やまとをゆきてあるしかのこゑをきく
妻呼音者之毛有香
はるのよりふこゑをきくなりのこと

秋萩子之散過去者左牡鹿有
あきはぎのちりすきゆけはさをしかは
和備鳴將為名不見者之焉
わびなきなんちなにをかみる
秋萩之咲有野邊者左小牡鹿曽
あきはぎのさけるのへはさをしかは
露予別作嬬問四家類
つゆをわけつつとひにけり
奈何牡鹿之和備鳴為成蓋毛
なにをしかのわびなきするけ
秋野之萩子也藥將落
あきのはぎのこ也くすりをち
秋萩之開有野邊左小牡鹿者
はぎのさきるのへはさをしかは
落卷惜見鳴去物平
をちまきをしみなきさるものを
見日木乃山之跡陰尓鳴鹿之
みるきのやまのあとかけになくしかの
聲聞為八方山田守酔兒
こゑをきくとやはちかたの山田もりすと

[illegible]

題ふハ蝉乃字之寺ふ
日晩ころ同題歌
絶句も連寄ふハ蝉
ハ夜月光ハ秋ふ月こ
こ〳〵ハうこつ〳〵ニ月
ひきこせ乃辛〳〵吹
山〳〵ハ吹地〳〵秋
をしき故きり〳〵す
絶て鳴こ〳〵も聲

詠蟬歌一首　作者未詳

暮影　夜鳴　日晩　幾許
ゆふかけよりなきそめしこの
毎日　聞　不足　音　可聞
ひこと〳〵ハ聞ぬ日ハなしと
詠蟋蟀歌一首　作者未詳

秋風之寒吹　来倍　吾屋前之
ひきこせ乃さむ〳〵ふくまくわりやとの
浅茅之本ニ蟋蟀鳴も
あさちふにきり〳〵すなく

影草乃生有屋外之暮陰ニ
かけ草乃ひ〳〵なりやとのゆふかけよ
鳴蟋蟀者雖聞不足可聞
なくまきりすハきけとありぬへし
庭草ニ村雨落而蟋蟀
ふるさとに〳〵さめなりてきり〳〵す
鳴音者秋付ニ家里聞
なくこゑハきけハあきつきふるさと
詠蝦蟆歌五首　作者未詳

三吉野乃石本不避鳴川津
なくこゑハ
諸文鳴来河平浄かのせまりゝ名古
むへなる川なきやなる
神名火之山下動去水丹
なるひ乃山ニなくこゑハ
川津鳴成秋登將云鳥屋
ハなつ〳〵ハ秋こいなん
かけ草乃ひ〳〵なりやとの
影草ハ物ふの草
なり　詞林采葉ニ
ハ夕ふ草ニ同ハ山夕
作者　第一秋草
夕ふ草ふ花ふ吹
ふ草ハ対句ハ秋
秋ハ草ハ秋ハ
鳴〳〵夕附日ふ
なる日こりすこと
なくこゑハ
なる風ハ三ハのせまる
なくこゑハ秋の氣
なるこゑハ秋ハ
なるこゑハ
山下とふ草ハ
ひきゆく〳〵ハ春ハ

山よりもとりもとりもと

草花一八首歌の題

秋萩の枝もたわゝに置露の
寒時者成尓家類可聞

白露與秋者戀亂
別事難吾情可同

吾屋戸之麻花
手觸吾妹兒落
白露乎
露尓爭而芽子之遊為

秋田苅
衣手借廬乎作吾乎居者
露置尓家留

日來之秋風寒
令散芽子之花
白露置尓來下

秋田苅苫手搖奈利白露村
置穂田無跡告尓來良心

一云告尓來良思母

詠山歌一首　作者未詳

春者毛要夏者緑
紅色尓匂秋
丹之之
春山可聞

詠黄葉歌四十一首

柿本朝臣人麻呂

妻隠イニ矢野神山露霜尓
散巻惜
尓寅比始
朝露尓漬始
秋山
鐘礼莫零
在渡金

九月乃鐘礼乃雨冊作者未詳泊通
春日之山者色付冊来

雁鳴之寒朝開之露有之
春日山平令賞物者
比日露冊吾屋前之
之暁
芽子乃下葉者色付尓家田
雁鳴者今者来鳴沼吾待之
黄葉早継待者辛苦冊
秋山乎謹人縣勿忘西
其黄葉乃所思君
大坂吾越来者二上尓
黄葉流志貴礼零作

みとしのくれかへりぬる
おいさらをわりて
大坂　和名云大和葛城
郡　二上八雲大和こ
ひさされハ
うしの神まきしの山
紫の袖を花ふきく心
ふかいけ
とくことのうり紫
神ハまきしの
巻手山未詳
ちれ
妻梨　新の
ぬ梨の一種
ぬ梨の
ぬ白ハ

秋去者置白露尔吾門乃
浅茅何浦葉色付尔家里
妹之袖巻来乃山之朝露尔
仁寶布黄葉之散巻惜裳
黄葉之丹穂日者繁然鞆
妻梨木平手折可佐寒
露霜乃寒之秋風丹
黄葉金来毛妻梨之木者
吾門之浅茅色就吉魚張能
浪柴乃野之黄葉散良新

雁之鳴乃聞鶴奈倍尔高松之
野上之草曽色付尔家留
吾背子我白細衣往觸者
應染毛黄變山可聞
秋風之日異ひてふく者水茎能
岡之木葉毛色付尔家里
雁鳴乃来鳴之共韓衣
裁田者黄始有
雁之鳴聲聞苗荷明日従者
借香能山者黄始南

[illegible]

四具礼能雨無間之零者真木葉毛
[illegible]

爭不勝而色付尓家里
[illegible]

灼然四具礼乃雨者零加國
[illegible]

大城山者色付尓家里
[illegible]

大城山者在筑前御笠郡之大野山頂
[illegible]

風吹者黄葉散作小雲
[illegible]

吾松原清在莫國
[illegible]

物念隱而座而今日見者
[illegible]

春日山者色就付尓家里
[illegible]

[illegible]

九月

白露夏而足日木乃
[illegible]

山之持黄葉見幕下吉
[illegible]

妹許跡馬鞍置而射駒山
[illegible]

擊越來者紅葉散筒
[illegible]

黄葉為時尓成良之月人
[illegible]

楓枝乃色付是者
[illegible]

黒髮異霜者置良之高松
[illegible]

野山司之色付見者
[illegible]

歌林良我小人里ともにとそて[illegible]

乃四しとゝと乃安云可ハ清くさし五葉
里と乃う者をきくんとし者小和ゆすれハ吹ゆとゆゆ
ゆきくもの日のひかりよ異者露童
りかくる毎日
あきもされか葉
秋風之芽子之下葉者色付来
類聚ハかせのをやさう
と和と新兵ゝ
ゆきくもの日のひかりよ
芽子之下葉者色付来
もやれ出
秋芽子乃下葉赤荒玉乃
あきもされ
月之歴去者風くもの疾しなき鴨
ゆきかへ
真十鏡見名淵山者今日鴨
白露置而黄葉将散
吾屋戸之浅茅色付吉魚張之
わりやとの
夏身之上介四具礼零疑
あけの
雁鳴之寒鳴從水茎之
かりかねの

云大和心詞
かりくものさもくらく
心詞
ゆきとゝきれ下葉の
山ゝ類聚ハ
ゆきハ
小古点百日ん
ゆゆ
ふハ
あすゝハ和葉
ゆけ
いもくひ
立て
山ゝ奥儀抄ハ

岡乃葛葉者色付介来
秋芽子之下葉乃黄葉於花繽
時過去者後将戀鴨
明日香河黄葉流葛木
山之木葉者今之散疑
妹之紐解登結而奥
今許曽黄葉始而者家礼

雁鳴之暄之從春日有
かすみのうちにさかりなる
三笠山者色付冊家里
みかさやまいろはなにそなりにける
比者之五更露介吾屋戸乃
このころのあけつきつゆ
秋之芽子原色付介家里
あきはぎはらいろつきにけり
夕去者雁之越往龍田山
ゆふされはかりのこえゆく
四具礼介競イクラヒ色付介家里
たつたやまにしきをあらそひいろつけり
尤夜深而四具礼加雫秋萩乃
さよふけてしきれかしたる秋はぎの

本葉之黄葉落巻惜裳
もとはのきみちはちりぬ
故郷之始黄葉平手折以
ふるさとのはつもみちをたをりもて
今日曽吾来覓人之為
けふはわれこそはきたれ人のため
君之家乃黄葉早落
きみがいへのもみちはやくおちにけり
四具礼乃雨介乗沾良之母
しきれのあめにぬれてよしもな
一年情介不飽過之鶴鴨
ひとせのなさけにあきたらぬつるかも

詠水田歌三首　作者未詳

足曳之山田佃子不秀友
あしひきのやまだつくるこひてなもと

苗不秀のいさる哉
仙日ひてけるこそ
ちるすらもこりはちり
よくもあらもこそ
ふえつよさとも
きんこよめる歌題
さとをちの乃はまふ
人麻呂の家のあるを定家卿詠歌大概云
雲乃内の鹿乃ちるを
をけ行る稲なる鹿乃ねを
早田の家乃末ちる
ちる迄行乃内
わかうたいとる四を
さかの内は大和佐保の
境内に春日ふ
をもを四ちる

縄谷延興寺登知金
ちめるこよるこをちるね
尤小牡鹿之妻 嘆ぶ山之岳邊在
さをちの乃はけふ山ちる
早田者不苅霜者雖零
わさ四を
ちるこ
きるねい知ふ知んの哉
さをちの乃はまふ
さ哥彩哥
雲乃水四
ふこ哥ハ
ふて今三
ふて今三
ふて今三

萩はらをやすらへまほしあれはせこりかうしとゝ
こゝろあきはけまの月夜
はなちてゝいわれぬ
よ心あき月のてりて
うちなきて蛩
おりてすかたれの為ハ
心ハとかいこいのあ
そきのいなさくのを
ゝりをのをい助字
萩咲月はきを二人
見やりさこゝろ
よめる歌ともを我独
見て感をすかこ人
より明月照月はと
きゝ露を出のゝ

秋月夜之物念跡
無心
こゝろあもさけきれ月夜の物ゝ
麻 不眠宿 照 作 本 名
いのわれぬるてりてゝ
不念 尓 四具礼 乃雨者 零 有 跡
おりてすよきれ乃為ハ
天 雲 霧 而月夜 清イさやけ弓号
けりとゝとれてつきよきを
芦子之花 開 乃乎 毎入緒 見代跡可聞
そきのいるさくのとゝりとゝ
月夜之 清 戀 益 良國
はきれきよきこひきすゝ
白 露 乎 玉 作 有 九月
きゝはいをゝ
在 明 之月夜 雖見 不飽 可聞
けりちけ乃月夜れこあうねゝ

とりのこゝ
こひつゝしいきゝ
稲葉の中小家居を
すはいゝ恋を信
ゝき秋の夕風吹
こゝ一とのゝ心をゝ
きゝもけゝとゝ云
そきけりゝ咲
萩咲蛸吹秋景を共
ゝ秋風吹て狂結
ゝゝゝねゝゝ
あきゝ乃まのゝ
秋もゝ乃ゝ
ゝきゝ今ゝの風
もゝゝく肌をきゝ
錦ゝけゝ

詠風歌三首 作者未詳
戀 作 裳 稲葉 擽 別 家居 者
こひけゝもいおゝけいへゝ
乏 五有 秋 之 暮 風
芦子 花 咲 有 野邊 日晩 之
をきけりゝ
鳴 奈流 共イなる 秋 風 吹
ゝゝゝゝ
秋 山 之 木 葉 文 未 赤 者
けきゝのこけゝ
今且 吹 風 者 霜 毛 置 應 久
けさゝゝ

詠芳歌一首 作者未詳
高 松 之 此 峯 迫 尓 笠 立 而
ゝゝのこれゝ
盈 盛 有 秋 香 乃 吉 者
ちさけ秋乃

しるやとのぬしはいかなる人にかあらん
ゆかしくてこゝにはべるなりけりと
問へばこたへていはく
家もせにみねのかもてるもの思ひ野もせ
にたちまさるなりけりと
詠雨歌四首　柿本朝臣人麻呂
一日千重敷布雲我戀
ひとひのいはちへにかさなりてかくのみ
こひわたるかもあまくもの
常為暮零礼見
ゆきかよふらんあれをかもこん
作者未詳
秋田苅客乃廬入尓四具礼零
我袖沾
わがうへにぬれとをとはしたはれ
玉手次不懸時無吾戀
しるるものとはきけねこきあるとこひ
此具礼志零者沾乍毛將行
ぬるとはしたはれもこん
黄葉乎全落散四具礼能零苗尓
ちりぬとおもふまでにもこゝにこ

ひねがはくはきみがいへのにわ
てをこんがはるまでにはなを
まつてをしゆんと
こゝにちりぬをおもふ
類聚三代格に
和銅五年の詔
三品以上の
夜副衣
夜副衣寒
詠霜歌一首　作者未詳
天飛也雁之翅乃羽之
何處漏
いたくふりてしもはきにけり
香霜之零異牟
秋相聞
五首
金山舌日下鳴烏
音聞
ゆきとやまれるかもとりのこゑ
何嘆
こゑはすれどあはぬかもあるかな
誰れ彼
我莫問九月
しらつゆをなにとわがとはなくに
露沾作君待吾
ぬれてきみまつ

被日とうれいかとうみたし
ひかりの誰うれいこそ我
とあるこいうとうつゆ
あきのよれ書立
さあきしく
ひかりされのひかりる
上方序者へ姉より出ハ序
さくりしこと類聚ニハ
おいなりき彩点ハ廉く
秋山より言ひ切りひ
秋山の零落するとそ
ひく光ひきるとも
云とわすれんやと云
すみのえのきしを四
久ちく蓬屋ハ整遺ニハ
屋と思ひりとそ

秋夜霧發渡風
あきのよれまりくわるのさかりる
夢見妹形矣
ゆめれこそ
秋野尾花末生靡
ひくれのおなるすえのおひさ
心妹侍鴨
こころそいしてよりふるるし
秋山霜零寢木葉落
秋やまふかみ霜ふりおりいこのそちる
歳雖行我忘
ちいゆくこしもれわすれめや

寄水田歌八首

作者未詳

住吉之岸平田尓蹶蒔稻乃
すみのえのきしを四るうまきいねの
而及新不相公鴨
ちうしひるまくけうをねきけうも

ひかりおすれみとた
人九ひ方ひ九ひ雲原
とりハ田尓作るを
一ちひ方ちひ
劍の鞘尻尓金物を書
故おひく四井の松ハ
劍ひ尻とるし玉ひく四
井ひひ方ひ玉未考
秋の田れ穂の上よ
序者へ序の
秋ひ田れおけひ方
ひくとりこハ一偏尓
尓とかされくいて
心一況序者尓秋ハ
ひとよ人ハ雖白き
ものとちの心と

劍玉纒田井尓及何時可
妹平不相見將居
あきの田之穂上尓置白露之
可消念吾者所念鴨
秋田之穂向之所寢片緣
吾者物念御禮無物平
ひるハとものおもひまをあを

秋田叫借庐作五百人為而
あきの田を叫いかりて
有藍君叫將見俵毛欲得
ひんまをとんちしる

あきの田をかりいれ
田家の人さびしかるべし
しらぬ人きこゆる
笛の音は秋なる男の音
なるべし
久方の月の出をし
今思ふらんかの人
しらぬ人とは
兄安云雁の
なるべし
玉東も秋は
なるべし
田を編ふる
ふるこ
ぬを
あきさきの
ちる

鶴鳴之乘聞　田井介五百八為而
つるねの
吾客有跡於妹告社
わきもこ
春霞多奈引田居介廬付而
かすみ
秋田苅左右念思良久
あきの田
橘平守部乃手ヒの門田早稲
たちばな
祈時過去不来跡為等霜
ときすぎ

寄露歌八首

秋萩子之開散野邊之暮露介
あきはぎ
沾作夜者深去来益
ぬれ

作者未詳

色付相秋之露霜莫零
いろづく
妹之手本乎不纏今夜者
秋萩子之上介置有白露之
あきはぎ
消鴨死猛
けりし
吾屋前白市
わが
秋萩乎之努介押靡置露
あきはぎ
消鴨死益
けりし

五十　六十三

左今秋の
野の
いと
秋の
ぬる
秋の
ぬる
白露の
ぬる
ぬる
ぬる

[illegible]

露霜尓　衣袖　所沾而　今谷毛
[illegible]

妹許　行名夜者　雖深
[illegible]

秋萩子之　枝毛十　尾尓　置露之
[illegible]

消毛死　猿　不有者
[illegible]

秋萩子之　上尓　白露　毎置
[illegible]

見管　曽　思努布　君之　光儀平
[illegible]

寄風歌二首　作者未詳

吾妹子者　衣きぬ冊　有南　秋風之
わすれこいころもにかけもん秋ぬせの

寒　比　来　下　著　益平
さむきこのころ乃きまさるふきまさるを

泊瀬風　智　吹　二更者　及何時
もつせ乃せ乃ゝみくよりいつまてしら

衣　片　敷　吾　一　将宿
ころもかたしき乃きわまひとりわん

寄雨歌二首　作者未詳

秋　萩子平　令落　長雨之　零　比者
萩のさえきをちらすなかあめのふるころハ

一　起　居而　戀　夜曽　大寸
いとりおきてこひるわかちをさ

九月　四具礼乃　雨之
ながつきの　しぐれ乃あめ

一云　十　月　四具礼乃　雨降
一云　ながつきの　しぐれ乃あめ

山　霧　烟寸　吾曽　誰平見者　蔣恵
やまきりの　けむすわかそ　たれにみせ　ましを

寄蟋蟀歌一首　作者未詳

きりぎすなきてあさ
蟋蟀ハ秋を待なげくなりけり
なげくとてやはねぬる
秋ハ来と待なげくなりけり
て秋とぬれいねる
しきりなきてあさ
秋ひよ鄰して武蔵野
とよやりけ方蟋蟀之
所之の字結字ニ
されときりぎすの秋を
待侘ふ心とハ
あさおきすれハ
もとる又ハ集十六
らくと云ふ歌林良材云歌林の類聚古集ハ
夏部歌火乃篇ハ
乃住屋を離居
蟋蟀之待歓
秋夜平
寂験無枕與吾者
ぬるとてあるとてあるとてあるとてあるとて

寄蝦歌一首　作者未詳

朝霞　鹿火屋之下　小鳴蝦
あさかすみ　かひやのしたに　をなくかは
聲谷聞者　吾将戀　八方
こえをきくハわれこひんやも

相聞乃寄心
とハ彼菴乃下に火を
たきて煙を
或合掌衆数亦今去雉鹿也然於鹿者縦有義至于煙炎者
可為一決
ハ苦熱乃洞
ハ不実
彼寄り
相叶
風林
多流
蟹を
屋とハ
伝ふ
奥伐
ハ口
仙
八中
ハ
伝成
家
伝成乃
鹿火屋
者
鹿ハ
彼
者
ん中

万十　六十五

いてゝいなハのもゝ
天ゝふ屋ハ明ぬ子と
いゝん風雅ゝ寺の心も
別をおしむ人乃紙出
ていなハ明ぬきゝゝり
乃ゝゝとゝいゝゝゝゝゝ
年をへゝゝゝ

去者天飛雁之可注歟
是今且是今且去二年曽經去家類

寄鹿歌二首　作者未詳

さゝゝ乃
花小牡鹿之
隱
ゝゝゝ
不得而於人
花小牡鹿之小野草伏
乃
朝伏
小野之草若美
名
所知
灼然
吾不問

寄鶴歌一首　作者未詳

今夜乃曉降鳴鶴之
念
許増益也

寄草歌一首　作者未詳

道邊之平花我下之思草
今更介何イ事物可持念

仙花ハ桜よ或ハ茅とよりとりてよりとりて用ひて家の内外を飾り
寄花　秋の草むら
よりまれゆの色
ちりまがひまきくす
四月

寄花歌二十三首

作者未詳

草　深三　聽　多　鳴屋前
ちさとりてすきかくすすけてちかくあか
芝子見　公　者何時来　益　年
ちさとりてきてはつりきすさん
秋　就　者　水草　花乃阿要奴　蟹
ちりさけはてはつりきれ花のあへねくよ
思　跡　不知　直　尓　不相在　者
なりへとちとくふあはれ
何　為等加　君　干　将厭　秋　芝子乃
おふすすきをいとりん秋えまの
其　始　花　之　歡　す物乎
すのえつ花のうまきあを
ちくさちてちふあはねきしと

展　轉　戀　者死　文　灼然
こひまろこひをしもいちしろく
色　庭　不出　朝　容貌　之　花
いろよはいてはいてあさかほの
吉　出而　云　忌深ゆ長　朝　貌乃
ことうはいてはいてあさかほの
穂庭　開　不一出　戀　為　鴨
ほのはさきてとこのをするかも
雁　鳴　之　始　音　開　而開出有
かりかねのはつこえきてさきて咲てある
屋前　之　秋　芝子　見　來　吾世古
やこのはのはつあきくさをみてわせこ

五十　六十七

あをすすきをの花を
はすすきをとて花をとて
むしの秋の初花の如く咲
ちく脆の物をと
こひまろこひをしもいちしろく
ばの名よイ本展傳と
花の名よイ本展傳と
仙日展轉こひまろこひ
こひまろこひ
ちくさ日新よ赤色三
はつ色ハ花をとて我ハ
よりも色　五東展轉ハ詩關雎ゑ展轉及側
ことふ出くいとこ
えをとて　言ハ中くいとこ
かりよりとりて

さをしかの乃つまとする
（野小鹿 祇母ニ）
（野乃為酢す 初尾花
さをしかの乃つまとする
何時如 妹之 將手枕ニ）
いつしかもいもをまくらにしてしかな
（戀 日之氣長 有者 三苑圃能
こゝろ日のけなくなれはみそのゝ乃
辛藍 花之色出 介來
かゝ）あゐの花をのいろにいでこしら
（吾卿 介今咲花乃 堀部中敬之子女郎花
わかさかりいまさかりなる花乃ゆゑ
不堪 ニ ず情 尚戀 二家里
しのぬこゝろ
芋子 花咲有乎見者君不相
なさ乃花をかさしてとゝれは君ふあはて
真毛 久 二成 來 鴨
まこもひさしくなりにけるかも
朝露 介咲 酢左乾 岳 鴨頭草之
（あさつゆ介さきすさまつさ草の
月斜 共 可消 取念
つきかたふくまでおもふらもけぬつゝおもふゆ

長 夜 平於君戀 作 不逢 者
（あきの夜を長しとおもふこゝろは
朋 而 落 西 花 有益乎
ともしくをちかたかけてすゝ
吾妹子介相坂 山之 皮 為酢す
（わかいもこにあふさかの山のすゝき
穂庭開 不出 戀 渡 鴨
わかやとのにさきていでこいわたるかも
率 介今毛欲見 秋芋子之
いさなゝ今もみてしかなあきの
四 挑 二 將有 妹之光儀乎
（ちゝ二かけんいもとりすがた
秋芋子之花野乃為酢す穂庭不出
（あきの花野のすゝきほにいでゝ
戀 平 作 者
こゝろ
（あきの夜を長しとおもふこゝろは
ともしくをちかたかけてすゝ
（ほすゝきの穂に出ぬこゝろ
（仙日月黄葉 之方の花は彩日新のこ
ろ乃ゝと咲花は月新
（よ乃中は月黄と云
（あきの黄葉を天ふ意
（長夜を独寝て天ふ
（ほすゝ黄葉のこ
（いくもの中ふ意
（ゆゝしく乃中ふ意
わきもこ序 之 の廣は稀まゝ出ぬと云し下る心
いさなゝ序 率 乃字 玉篇云千忽切急也 ちゝ 秋
萩の八ちゝ八ちゝ風 ちゝ 月八宝 ちゝ
千ちゝと云 秋芋子之花野乃為酢す穂庭不出
（わきもこ
（いさなゝきの乃花野のすゝきほにいでゝ

才一才二百八十五首

こいしん風体

けまは人きれぬ所の

一重姫くしも四字

吾戀　渡隱　嬬波母

わりこいわたるこゝろ

吾屋戸尓開　秋萩散過而

寶成　及冊於君不相鴨

みるまゝに

吾屋前之　芽子開二家里不落間尓

わりもとゝ乃そぎさきふりちりぬゆに

早来　可見平城里人

をやまさきに見しちりさと人

石ゝ走

花西　開開生有類花乃

もかみ

藤原　有来在筒見者

あをとりの

故郷ゆきゝやと　秋萩者

わちりあ里ぬあきいさ

開而落去寸君待不得而

さきゝちりあきを見やちりて

秋芽子平落過沼蛇手折持

ちりぬるをねゝ

うつゝさき花せと

山ちゝのかりみさと

類聚三十ゝさ子やこの

三和と八重おり萩の花

大和と三東乃すゝき

ゝちまねを路ゝ

ゆきつゝきと蕃ゝ子

萩はわえてゝ乃ちまね

いりひゝく蕃ゝ

ゆきとさきゆゝ

序奇

あきつのゝかゝるゝ

八重物ゝ

秋は野乃尾萩を秋萩乃花

雖見不怜君西不有者

朝開夕者消流鴨頭草

可惜

けぬつゝこ

戀毛吾者為鴨

野之尾花苅副秋萩之

あきつの

花平菅枝君之借廬

咲交不知師有者黙然将有

此秋芽子乎令視管本名者

この

芽子乎令視管本名者

寄山歌一首　作者未詳

秋去者雁飛越龍田山
しきりしなれば
立而毛居而毛君平思曽念
ものを

寄黄葉歌三首　作者未詳

我屋戸之田葛日殊に色付奴
不来座君者何情曽毛
足引乃山佐奈葛黄変及
妹介不相哉吾恋将居
黄葉之過不勝兒乎人妻跡

おりつきの月あり所は
一二の白川のほとりにて
いとん風流ありてもと
ゆかしきかたのものなり
とかくしてまりけて
ちとうそ　まりけていか
てすかりとこそいへ
ゆきもまねかぬ國
ちりをやしをとこ
ちりくいなまの雲ぐさ
とすれとてりみくイキ
えやーとそとそと同意
わひ人のあるかなと
貧賤の侘人は畳の塵
を佛にて秋はちりくに
ゑ小福えて時すとは
ちりを思ふとなんと

九月　之　在明　能月夜　有作毛
おりたちまた　君之来座者　吾將戀　八方
きみ　きまさはわれこひめやも

寄夜歌三首　作者未詳

忍音咲八師　不戀　登為　跡　金風之
ちりえやしをとこ　寒　吹　夜者君平之曽念
とりくいなまの雲ぐさ

惑者之痛情無跡將念
わひ人のあるかなと

秋之長夜平寐師耳
あきのながよをねさめしくの子

秋夜半長跡雖言積西
秋乃夜半をとこ

戀盡者短省家里
こひをつくせてかりかり

寄衣歌一首　作者未詳

秋都葉介尓寶敝流衣吾者不服
秋のはをおりこ

於君奉者夜毛着金
ゆきもまるまるこ

秋の夜もおりこ
ゆきつはなの白

仙日秋はとは蜻蛉也あきつとをあつまりて
えぐとこそえいあきさ赤ねとはいふ
ふわけの夜　重頻和名云赤蜻蛉
とせハイまきハ皆同奉ら
永と秋はまきて
意もやせんとなり　一説あきつとは
いまきひもく
様ねハ子ふ
ふれ紅ふ
と秋中ハ口舌為
ちきの夜や独ねる
きそれ

秋の夜をおりこ
秋の夜もおりこ
ゆきつはなの白
つきとされハ秋
の夜もまるまる
ゆきつはなの白

問答歌四首　作者未詳

旅　尚　禁　解　物平　事繁
しひまくらのを事ふ

九宿　吾　為　長　此夜
まくねわ　ふるあきこれ

四具礼　零　曉　月夜　紐　不解
きそれ　ふるあつきつきよひもとす

[illegible]

戀

君跡居益物

[illegible]

於二黃葉

置白露之色葉二毛

[illegible]

不出跡念者車之繁家口

[illegible]

雨零者瀧都山川於石觸

[illegible]

君之摧情者不持

[illegible]

此一首不類秋歌二首而以和載之也

[illegible]

上句ハ[illegible]

[illegible]

此一首不類秋歌 此歌[illegible]

和の歌ハ[illegible]

[illegible]

仙口神の社ひ[illegible]

神の社乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]陽炎に春天うまれ一日々の拡張一めぐり

冬雜歌　四首　柳本朝臣人麻呂

我袖に雪わかれて消ぬれば春の日の光見まくほしもあるかも

不消げなる有あるやいもうとの高巻向ひの山鴨之

足曳の山の木末の二三雪落来

檜原毛者雲居流

子松之末由沫雪流

[illegible]

[illegible]

冬雜歌　春雜哥ホ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あをやまれみねのを
奈良山乃峰尚霧合宇倍志社
雪ふりて寒い形棚
前垣之下乃雪者不消家礼
あをやまのゆきいけとられ
殊落者袖副沾而可通
ことのはのいとうてさくぬれてこそとくく
将落ことのはのを雪之空公消二管
ちるもみぢはのこと
夜平寒三朝戸平開出見者
あををさむみあさとをあけて出てれい
庭毛薄太良公三雪落有
ふそとしたるふみゆきみりわ
一云庭裏保利呂公雪曽
零而有
ふりてこのる
暮去者袖寒之高松之
ゆふされはこそとてさむしこのまつの
山木毛雪曽零有
やまれはこのゆきのふりつる

仙四
ちとせとすと同韵
一云ちとせ
同三字ちとせ同音
ゆきされはこのもの
幾度
わりそてふかりつる
おれまそてい淡流れ
ゆきそしいゆきいいゆま
いけそゆきさいけ
女子姉わりそのをかや
そをりてもかりぬ宮
こちくはまこまさ
あれをそこ只えく
わりせこをりかりくと
彩丘如此類聚云けさ

吾袖尓零鶴雪毛流去而
わりそてふかりつるゆきもなりれきて
妹之手本伊行鯛糠
いもりしてにいゆきみまねう
冰雪者今日者英零白妙之
けそゆきいけるかりそこの乃
袖纏将手人毛不有恵
そてまきらんひともなくて
甚多毛不零雪故言多毛
そるそもねぬ雪ゆへこそ多毛
天三空者隱相管
われをみそらもあひて
吾背子平且今且今ばかり出見者
わりぜこをりけりとてそ
冰雪零有庭毛保利呂尓
けそゆきもりる庭もりる
足引白者我屋戸尓
あひきの山とりやまの白きは我屋
昨日暮零之雪疑意
きのふのくれよりりる雪かも

[illegible]

詠花歌 五首 作者未詳

誰苑之梅 花毛久堅之
[illegible]

清月夜尓幾許散來
[illegible]

梅花先開枝手折而者
[illegible]

翼常名付而與副手六香聞
[illegible]

誰苑之梅 家武幾許毛
[illegible]

開有可毛見我欲尤右手二
[illegible]

來可視人毛不有二吾家有
[illegible]

梅早花落十方吉
[illegible]

雪寒三咲者不聞梅花
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

縱比來者然而毛有金
[illegible]

詠露歌 一首 作者未詳

為妹 末枝 梅平手折登波
[illegible]

下枝之露尓沾家類可聞
[illegible]

詠黃葉歌 一首 作者未詳

八田乃野之浅茅色付有乳山
[illegible]

峯之沫雪寒零良之
[illegible]

詠月歌 一首 作者未詳

尤夜深者出來牟月平高山之
[illegible]

也されハ矢田野の陰
雪ハ久方ふる乳山に
ハ淡雪の降と云詠
のさまりけり 歌林 八九

月と雪とふ心詠る歌
るゆきれそふけぬく
消ぬ〳〵雪といひ
こそ淡雪の消ふと
いふなる可死歌心
雪のちるとも
雪の底を消りと
て袁ふ人と見いや
と見消てゆく雪
ハ咲ぬ〳〵山雪を見
ぬ惜ぬ〳〵山雪を忘

挙 白雲 持隠 鴨
みね乃雪〳〵もかくれん〳〵

冬相聞

二首 零 雪 虚空 可消 雖恋 榜李朝臣人麻呂

相 依 無 経 在
るゆきの乃ふけぬ〳〵こふれらし
あふを無みたきそ〳〵ふる

沫雪 千里 零 敷恋為来
ふりをとの乃ちさとふり来ぬ〳〵

食永 我 見 偲
けぬ〳〵わをやこひ〳〵ちのうん

寄露歌一首 作者未詳 梅之下枝置露之

咲 断 照
ちき出るうめの枝えふる露の

可消 於妹 恋 頃者
けぬ〳〵いもりこふるこのころ

ちきいてゝる梅の枝え
上ふハけぬ〳〵とふ
へき風

雪 降 夜焉
ゆきの乃ふりてゝ
ふる人ハ
ゆきの乃ふりてゝ
ふる人ハ
ゆきの乃ふりてゝ
ふる人ハ

寄霜歌一首 作者未詳

甚 毛 夜深 伽行 道 邊之
ふるしもよりけてゆくみちの乃

湯 小竹 之 於 尓 霜 降 夜焉
ゆさ〳〵乃うへのしもふる

寄雪歌十二首 作者未詳

小竹 葉 命 薄太礼 零 霞 消名羽鴨
さ乃をにふりおりしけぬかも

持志 霞 落 云者 益 耶念
わすれんとこゝろ
霞すれ落 云者 益 耶念

旗野 尓 板歌風 吹 寒 夜也
ふりてゝ風ふさむさ

吉名張 乃野 木 尓 零 霞 白雪乃
ふる野乃ふりの乃野木尓零霞白雪乃

市白 霜 持聽 吾 鴨
いちさ〳〵もこひんわれ

板屋風を板屋ちり
吹風 雄野 正業勅
みちのくの野末より
吉名雄野 大和 山野
とけるまゝ 上句は序
ゆつるはゝそて高き
思ひてこうはゝ思ひ
ひとめそ人をみるく
天雲 流る雲は消
なくくの孤雲 一見
しへ小雲てきゆく
なりゆくと
なりいつるこゝろは
思ふ人のゆゝしはな
おふ本綿山の雪
美のゝとき子をあい

一眼見之 忘尔 慈良文 天霧之
零 來 雪之 可消 所念
思 出 時 者 為使 無 豊國之
本綿 山 雪之 可消 所念
如夢 君平 相 見而 天霧之
落 來 雪之 可消 所念
吾 背子之 言 愛 去 者
愛引 雪仍 零
梅 花 其 跡毛 不所見 零雪之
市白 名 聞 使 遣
いちしろけんおまけたるいやしく

わせこゝこゝとうつゝみ
こゝうつゝみは幸うつきと同 一云 零雪介間使 遣者其 將知 名
みちのくの雪ふる雪のやうに人しれぬ
うめの花 ふれもしてと 上句序 思ふ
同 一云 上句序 思ふ
ふりくる雪のきゆれとも
天霧 相 零來雪之消 友
一云 句は序 流れと
とけ君をまんとふ
ふりくるとも
うつゝふとふる山雪の
八重 ふりくるとふ
とけるとやいへ
消 ふる山は同 對
あまとつれとつの 上句はけ乃字をいふ序 喫島 流る君 吉

天霧 之 雪 之 可消 時 者 為使 無 豊國之
思 出 時 者 為使 無 豊國之
本綿 山 雪之 可消 所念
如夢 君平 相 見而 天霧之
落 來 雪之 可消 所念
吾 背子之 言 愛 去 者
愛引 雪仍 零
梅 花 其 跡毛 不所見 零雪之
市白 名 聞 使 遣

万十下 七十七

天霧 之 雪 之 可消 時 者 為使 無 豊國之
思 出 時 者 為使 無 豊國之
本綿 山 雪之 可消 所念
如夢 君平 相 見而 天霧之
落 來 雪之 可消 所念
吾 背子之 言 愛 去 者
愛引 雪仍 零
梅 花 其 跡毛 不所見 零雪之
市白 名 聞 使 遣

寄花歌一首　作者未詳

萬葉集巻第十

貞享三年丙寅二月十二日書于新玉津嶋實前　墨付七十七枚　季吟

国立公文書館
National Archives of Japan